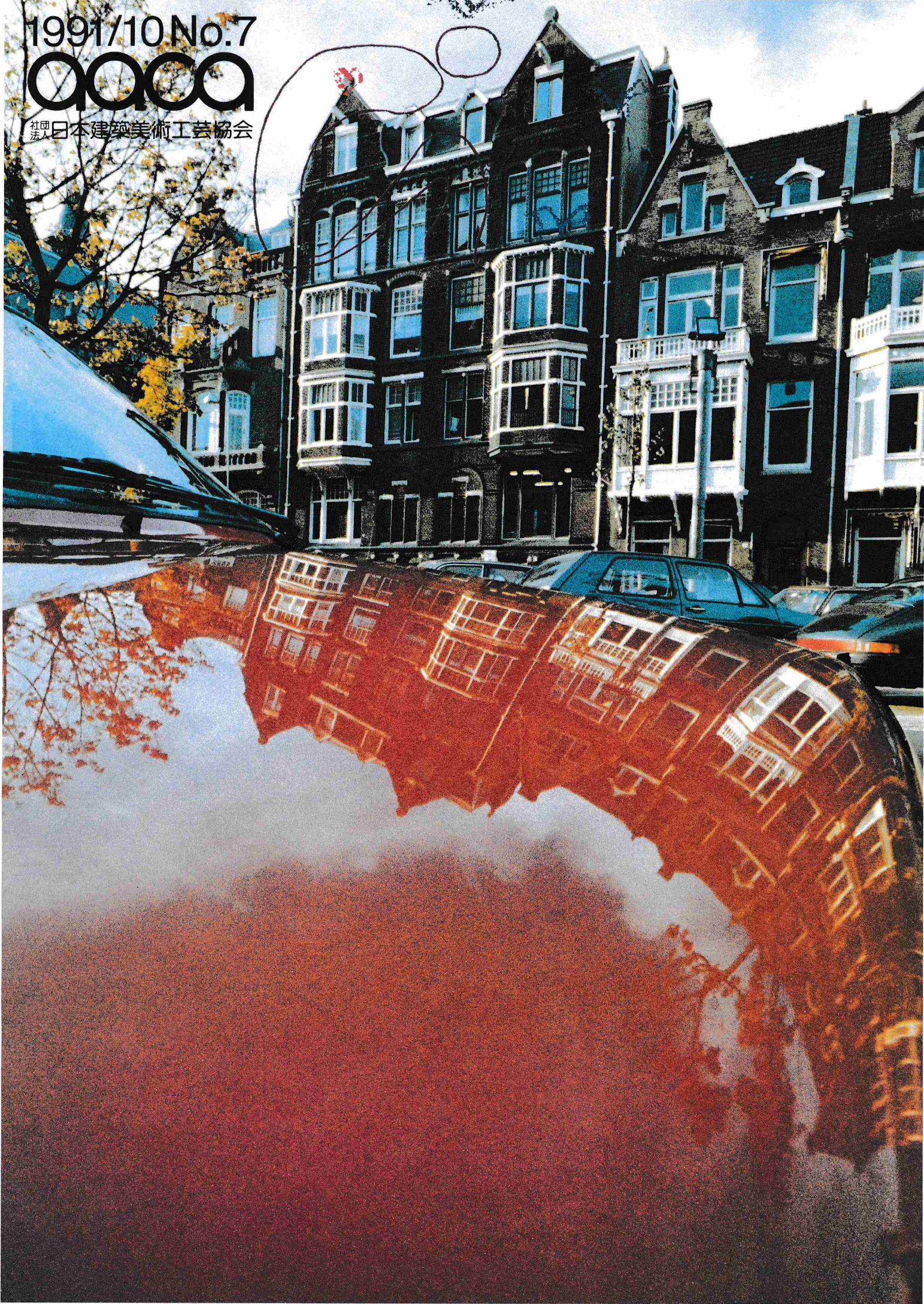


1991/10 No.7

QOQO

社団法人 日本建築美術工芸協会



CONTENTS

座談会

「美しく、ゆとりある環境の町づくりを」

出席者：柳澤孝彦、高橋志保彦

豊口 協、永原 浄…………… 1

時代の華一輪

小 玉 功…………… 13

高 部 多恵子…………… 14

文化庁への報告書

ポーラ・G・シューマン…………… 15

TOPICS…………… 18

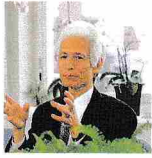
■表紙「アムステルダムスカイライン」

撮影：柳澤孝彦

窓と屋根にデザインを凝らした建物が、それぞれに個有の美しさを達成している。それと同時にそこには、互いに肩を並べ合って周囲に連続した調和を生む、連帯の心が潜んでいて、それが華麗で統一感のある街並みをつくりだしている。また、窓と屋根のごく限られたデザイン要素で、これだけ豊かな街の景観を構成している様は、京都など日本の古都の街並みに共通する構成原理が、ここにも健在であることを物語っている。

座談会「美しく、ゆとりある環境の町づくりを！」

出席者 柳澤孝彦 高橋志保彦 豊口協 永原浄 (発言者順)



TAKAHIKO YANAGISAWA

柳澤孝彦

(出)日本建築美術工芸協会理事
同 広報委員長
TAK建築・都市計画研究所
代表取締役

千代田区神田錦町1-7
錦町1丁目ビル3F
TEL. 03-3295-2477



SHIOHIKO TAKAHASHI

高橋志保彦

㈱高橋志保彦建築設計事務所
東京都港区芝1-13-16芝橋ビル
TEL. 03-3452-5443



YASUSHI TOYOGUCHI

豊口協

東京造形大学 学長
八王子市元八王子3-2707
TEL. 0426-61-4401



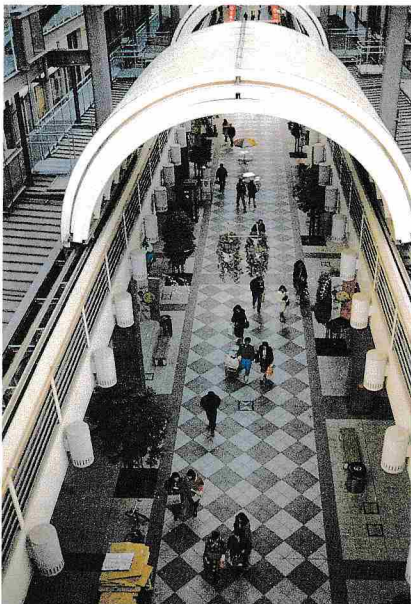
JO NAGAHARA

永原浄

照明デザイナー
東京都板橋区成増2-36-36
TEL. 03-3975-1800

(柳澤) 「美しくゆとりある環境の町づくりを！」目指して、日本建築美術工芸協会も盛んな活動が展開されて来ましたが今日は当協会会員の中でも、先鋭的に町づくりなどに関わっておられる各分野の御三方をおよびして、美しくゆとりある環境づくりについて語っていただこうとするものです。

最近、生活環境に於ける美的側面の充実を求める意識は高まって来てそれらが、都市景観についての関心につながって来ています。



仙台一番町モール ©高橋

しかしながら、今、私たちが住んでいる街を本当に誇りに思っているだろうか、又自らの住域環境の美化や保全に身近に関与しているだろうかといった点ではほとんど私たち住人の手の内になっていないという感もまぬがれないのです。

このような状況をふまえて、高橋さんは、モールづくりを発端に街づくりの研

究や実績を重ねておられる中で自らの手でつくる街という視点で発言していただけたらよいのではと思いますが――。

(高橋) 基本的には、アメニティーです。アメニティーというものは、まだ誰もこうだと言い切れないものがある、人間にとってより不快なものをできるだけ多く取り除いた状態がアメニティーというようない方で定義されます。自分の住んでいるところの周りや環境を考えたときに、今、柳澤さんがおっしゃった様な「誇りをもてる」ということを考えますと、結局は、満足度合いが大きいことではないか、ところが現在は都市の中でその満足度合いが非常に小さくなってきているのではないのでしょうか。

都市の中で満足度合いが大きい所は、文化的なもの、娯乐的なものなどがそこに集約されていて、かなりアクセスがしやすい。そうすると色々なものに接するチャンスが多い。色々な人が集まってくることによって多くの情報が得られるとかで満足感が大きくなります。一方空間や環境を考えてみると土地の問題や建設費の高騰も絡み、不満の方が多くなってきている。なかなか、誇りに思えなくなっている。ですが、住んでいれば愛着を覚え、限られた環境の中でも努力して、少しでもよくしようとする傾向は大いにあります。で、その努力を皆んなでやっという事例の一つに今、私の行っているようなモール空間づくりもあります。街の人達皆で協力し力を合わせて創っていかうということです。協同で創るとき、一番大事なことは、他力本願ではなく自分の身銭をきって創ることです。住宅地の中もおそらくそうだと思うんです。自分が何かの労働をして、いい環境

を作るとか、自分が木を植えるとか、自分が精を出さないとダメです。行政だけに頼ってはいけません。人にやってもらったものは初めはいいんですけど、だんだんきたなくなります。その点やっぱり自分の身銭を切ってそしてものをつくり、それを作るだけじゃなくて、守り育てていく。これがあると、大体成功しています。そして大きな満足感につながっているのです。俺たちがつくったんだ、ということがあります。ただデザインや手法において不馴れな人が多いですから、それに我々が入って提案をしたり、ある種の誘導をします。



仙台一番町モールの七夕 ©高橋

できるだけ皆でやっていく、そして、できるだけ皆さんにお金を出してもらおう。そういうことで、まあまあ少しずついい環境になっているかなと思っています。

(柳澤) 今お話の特にモールなどの場合はその街に「商」をして生計を立てている人達の共通する生計のスタイルが連帯を発生せしめて、それが街づくりのパワーになるという例ですね。そこにはそれぞれの家の生計がかかっているといった「深刻さ」が、統合を生む一つの要因であるともいえるのでしょね。

それでは、一般の住宅地などの場合はどうでしょうか。

(豊口) 昔、世田谷に住んでいたんです。

馬事公苑のそばだったんです。馬事公苑が非常に生活に精神的なゆとりを与えてくれたんです。突如あそこに環八が通ったんです。とたんに、24時間騒音の真直中の環境におかれたんです。それで、今までとあまりにも環境が違い過ぎるものですから、結局、引越してしまったわけです。公共的な要素がすぽんと入ってきて、それが環境を変えていくということは随分あると思うんですね。それから考えると、湘南地域に住んでみてわかったのは、住んでいる人の生活意識が明るいんです。他の人が来ても拒否するという要素が全くない。きたら一緒になって楽しみましょう。海があれば、そこで海の生活を楽しみましょう。で海が終わったら今度、陸で楽しむとしましょう。ですからテニスをやろうといえば、そういう人たちがパッと集まってくる。海で泳ごうと言えば海に集まってくる。ヨットに乗ろうというヨットに集まってくる。未来に対して将来に対して、自分たちの生活を通して夢を語り合うという場が非常に多いんです。仕事が終わって、たと

えば土曜日の午後にさっと集まってくる。それぞれ全部職業の違う人ですね。仕事を離れて、皆んなで語り合うんですね。それが生活にとけこんでいるんですよ。子供同志の集まりもあって、おたがいに楽しい夢を語り合っかえってくる。これが、都市なんかの場合は、欠落しているのではないかと思いますね。

(柳澤) 湘南地域の生活意識の場合は自然環境がそれらを決定づける大きな要因ということでしょうか。

(豊口) おそらく鎌倉に対する歴史的な自分たちの生活の支えのようなものがあって、それが軸になっている様な気がしますけどね。ただ鎌倉にも問題があるんですね。大船地区も鎌倉市ですから、大船地域といいますと、どっちかという新開地で横浜のダウンタウンだという見方もあって開発もおくれるし、道路整備もよくないし、雑な街で、とりのこされているという感じですね。多目的な文化ホールをつくるという話が、実は大船地区につくられているのですが、それが旧市街につくった方がいいという運動が随

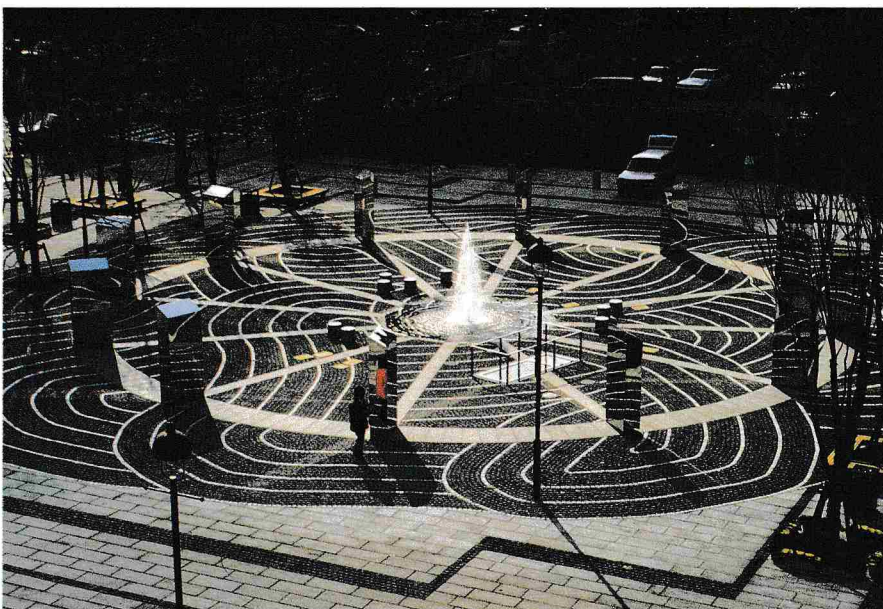
分あったんですね。

大船地域というのは、世界の街とコミュニケーションをはかれるような新しい街をつくっていく、歴史と将来の展望をもった街がいっしょに存在しているような鎌倉を提案していきたいですね。そういうことを少しずつできる街でもあったということですね。

(柳澤) その土地のもつ歴史性というものが、そこに住む人々の精神的な支えになっていると言えるのでしょうか。

住む場所の自然や歴史といったものと生活意識の点で永原さんはどうでしょう。

(永原) 今、豊口さんがおっしゃった鎌倉というイメージよりも、むしろ海岸ですよ。海岸というと明るくて広くて、遠くに行けるんじゃないかという希望のようなものがある。そういう気持ちがみんなあるから、すごく朗らかだといったところじゃないかなと思うんです。今いろんなデザインをしている中で、何かテーマはないかなと思うと、海というテーマが浮んで来て、それが明るいモダンなデザインにつながるんじゃないかとおもって旅行しようかなと思うときに地中海がいいのかエーゲ海がいいのか、そんな所でデザインの出発点が見つかるんじゃないかと、そこに希望として明るい自分のイメージをつくりたいんです。住まいは東京のかざられた地域の中にいるしコミュニケーションもない、だけれども自分としては、何かつながりのある広いもの、明るいものというものを求めている、そ



開港広場 ©高橋



二ース(Nice) ©柳澤

の点で海岸リゾートというのはひとつの生活場所ということかなあ。

(高橋) それは、永原さんハッピーなときに行きたくなるんですか。それともアンハッピーなときに行きたくなるんですか。

(永原) ハッピーもアンハッピーも同じで、明るい所へ行こうと思うんですね。たまたま近タイタリーに行くんですけどね。北にしようか南に行こうか、やっぱり南の方が何か僕につながるものがみつかるんじゃないかな、ニースは人がいすぎるから、もっと静かな港町のような限られた地域の方がデザインにあまり影響されないで、知らない人と一緒にごはんが食べられる所なのかなと思ったりしているんです。

(柳澤) とも角、永原さんのデザイン生活にとって、それがたとえ住んでいない場所であっても一時的な滞在であっても明るい海辺の地が永原さんのイメージを棲まわしている、だからそこはもう、先生に必要な場所であるという訳ですね。そういった各地の滞在の総和が永原さんの住域である。

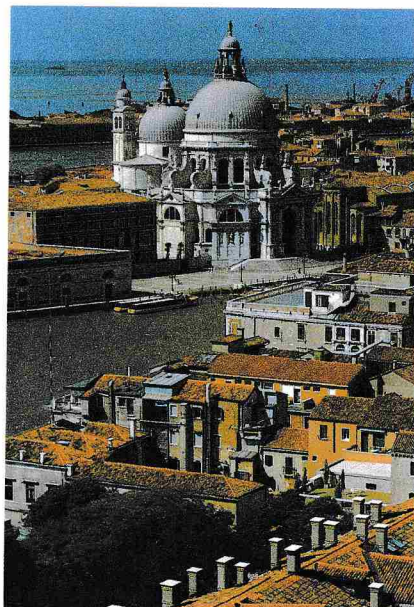
(永原) ベネツィアにいったとき知らない中年の人に声をかけられて、何かお困りですかときかれたんで、いやここはおもしろいから地図にマークポイントしているんですといったら、実は私はここに住んでいるんですけどもという話から一杯さそわれたんですね。警戒はしたんだけど、どうも大学の教授らしいんで、のこのこついていって、ごちそうになり、年代がちょうど僕より2つ上で、戦時中あなたはどうかという話から始めて、あなたは、ここに住んでいるんですかといったら、50年住んでいるとかで、私はもうここからどこにも行きたくない、週に一回ミラノに仕事に行くだけで、それで、もう、とにかくここに住んでいることに満足でベネツィアからどこにも行き

たくない、と考えているという訳です。車もない、騒音もないし、ファッションはどこに行ってもいいものはあるし、お魚、果物、いつでもマーケットにある。だから生活も困らない、欲しいものも満たされる静かな所で優雅に住らせる、これが私にとって大変有難いことだというんです。

(高橋) ここが一番いいんだ、他には行きたくないという満足感ですね。

(柳澤) 50年も住んでなおかつ、この街に住みたいという、それは本物ですよ。たとえば東京の都市なんていうのは、本当に50年も住みたいという人ばかりなのかというと、もうそうではないでしょう。たぶん東京の魅力というの、住むという概念の中では、かなり限定された条件になっていて、つまり、若い時期だけとか、仕事の関係とかで住まわされているといった側面がありますね。

(高橋) 東京の中で、例えば、僕の学生時代、友人を訪ねていった麴町や番町のあたりは全くの屋敷町で非常にいい環境



ベネツィア(Venezia) ©柳澤

でした。最近だんだんそれが消え失せ麴町はご存じのとおり、全部ビルになってしまった。ひとつには相続の問題があるでしょう。こま切れになり手放なさなきゃいけないという、物理的な条件、一方山手線の中は、一戸建てに住むというのは、ぜいたくすぎると国民的コンセンサス的になりつつある。この中はもうビルを作ったっていいじゃないか、日照権そんなに云々言うことはないじゃないか、言う人は外に出てってくれというふたつの流れがあるわけですね。その流れに棹さしてがんばっている人は、まだ屋敷をかまえている。そうでない人は、どんどん手放さざるを得なくなってでいてく。そのあとにビルやマンションが建つ。マンションというの、当然人工的空間にならざるをえない。都市における人間の生活として逃れられないものです。

(柳澤) 本当は一戸建て庭があつて、といった家に住みたいと誰でも思うけれど、東京ではもう極度の集中化やそれによる土地の高騰などで、それはできないんだということですね。

(高橋) パリやベネツィアでも戸建てではない。

(永原) もう、ほとんどアパートでしょ。

(高橋) 人工環境ですね。それでも50年も住んで、他に行きたくない。これだと思えますね。

(豊口) うん、そうそう。

(高橋) だから、そういうものに、東京をしていかなきゃいけないんで、どうも今は、ゴチャゴチャして、でやっぱり将来は外に出ていきたいとか、そういう話になってしまうので、これは本物ではないんじゃないかなと思うんですね。

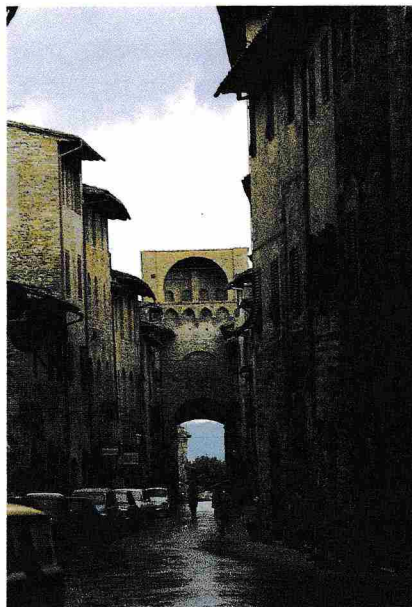
(豊口) ローマや、パリで何日か過ごすことがあるんですけど、僕が感心しますのはね、夜が明ける頃に鳥がものすごいんですね。僕、実は最初いったときは感激したんですよ。こんな石でできた街の中

でね、日の出とともにこれだけ鳥の声がきこえる、意外だったですね。もう1つは、あんまりいい話じゃないんですけど、朝散歩すると犬の糞がいっぱいおっこっている。こういう所にも犬が生活しているのか、あれは非常に人間的な共感を呼びましたですね。

(柳澤) そういった街に住んでいる人はそれなりに知恵を働かせて環境を作っているなという気がしますし、そういったところにはそこに住んでよかったという区域に対する愛着の意識を感じますね。そういう意識がないとなんとなく殺伐として、隣は何をするものぞになってしまう。

(高橋) 都市生活をする空間を考えてみますと、中世の頃ヨーロッパの多くの都市に城壁・郭閣が回っていてその中に住まざるをえない限られたスペースに生活する建物も部屋もせまい、そのかわり広場をつくる。こうプラスとマイナスがヨーロッパの都市にあったわけでバランスさせていたんじゃないかと思うわけですね。そして自分の生活のテリトリーみたいなものが、ある程度あるんですよね。そのなかで密と疎、実と虚、地と図、そういうものが自分の生活しているテリトリーの中にあることが望ましいと思うんですね。東京は、それがもうなくなってきている。テリトリーもないわけで、行政区分はあっても、何々区とか何々町といったところで、何にもわからない。品川区と目黒区の境があるんだけど、どこにあるのかわからないという、そういうところでは、やはり自分の街をよくしていくという気風がなかなかでてこないというのがあるかもしれない、で中世の頃は、ご存じのように、シエナとフィレンツェなんか、美や力を競いあった。だから美しい広場や塔がたつ。この一種の競争、これは何も相手だけではなくて、自分に勝つための競争でもあるんじゃない

かと、僕は思ってるんですね。相手に勝つための競争は普通の競争なんですけど、自分に勝つみたいなの、そういうところで自分の力を鼓舞できる。今の日本の都市の中で、健康的な競争をすることが大事じゃないかと思っています。商店街で僕はそれを言うんです、競争しようって、変な競争じゃないですよ、売上げだけなら、これは殺伐とするんだけど、環境づくりの競争をやるうではないかということだね。フランスの哲学者レジェ・カイヨワが言う遊びの4要素に「模擬」「眩暈」「偶然」「競争」があり、そのあそびの一つでもあるから競争をうまく使った方が、僕はいいんじゃないかというふうと思う



サンジミニアーノ ©柳澤

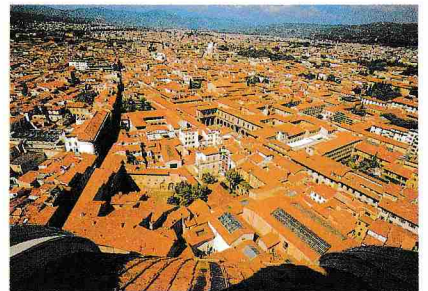
んですね。

(豊口) 横浜の元町が新しくなりましたでしょ。URUの金子さんのお手伝いをしたんですけど、たとえば車をシャットアウトしよう、それが新しい商店街だという話があったわけです。その時私は今、車を離して生活できるかという、まず無理だ、だから、とにかく車を入れて、車と共存共栄の街を、商店街をどうして

つくったらいいかということを考えましょうという提案をしたのです。だから我々は車を入れるということを絶対条件にしたんです。

(豊口) だんだん話合っていくとうまくいくんですね。そこの人たちも含めて、こういうふうにしましょう。中華街や石川町も山下公園も含めてやりましょうといった具合に、ずうっと計画の輪を広げていって最終的にはあそこに収斂したんですね。そういった中で木を植えたいという話があった、しかし掃除するのも大変だし、ファサードを樹の枝がじゃましたんじゃお店が見えなくなってしまうから樹はやめましょうということになったり、とにかく一番買い物がしやすい街並みをつくらうと検討が深められたんです。それで各店のファサードデザインは、それぞれにセンスを持った店主ばかりだから、皆さんのセンスにおまかせしようと、規制はせずに、むしろ街の人々が自らの手で一緒につくるといった状況が生まれた訳です。ですから元町の人たちは、自分たちが自からつくった街だという意識がものすごくある訳です。何人かのコンサルタントはそのお手伝いをしたという形なのです。

(柳澤) 自分たちがつくるという意識が



フィレンツェの街 ©柳澤

活きた美しい街をつくる、ということですね。

(柳澤) さっき高橋さんが言ったテリトリーですけど、今日は物理的なテリトリーしか残っていないといわれましたね。

(高橋) そうです。本来あるべきは、その連帯意識みたいな精神的なテリトリーがその街づくりのたぶん、コンテキストになるであろう、と、という意味からすると、一種のそういった帰属意識みたいなものが生まれなくてはいけない。いま豊口先生がおっしゃった様な街づくりというのは、少なくとも町という単位で、精神的なテリトリーというのがあるわけです。おしなべていって、今、自分のところというテリトリーが当然あるにしても、町をこえて、せいぜい区くらいの帰属意識くらいがかすかにあるかなというのが、東京の現代じゃないかという気もするんですけど。税金を納めるときに実感する(笑)そこに税金を納めた分がこのくらいの見返りがあった方がいいんじゃないかみたいな帰属意識はあるけれども、どうも本当の意味じゃないんじゃないかって気がしてます。エリアとしてのテリトリーというのと、内面的なテリトリーがあるわけですね。日本人のこの「ウチ」というものの考え方が非常におもしろくて、ウチの大学、ウチの会社、ウチの協会とか、何かこういう自分のものっていうのもっているんですね。ところがなぜかウチの街というのがない。このことばをもう少し使ってもいいんじゃないですかと思っているわけですよ。

(柳澤) 住空間などの専有できる自分の空間もどんどん極少化して来るし、その上、住いを中心にした地続きのテリトリーというのが欠落してきていることが背景でもあると思うのですが、全く自分が専有できる空間も自動車に見出している側面がありますね。ステレオを組み込んだりして、テリトリーが極限まで追い込まれているとも読めるんですが、IDの分野で直接的に社会と深く関わって活発なデザイン活動をされている立場で豊口さんいかがでしょうか。

(豊口) それはね、かって、非常に話題

になったテーマなんです。ご存じのように日本の場合は、住宅が非常に不十分であって、それぞれの人が自分の部屋を



馬車道 ©高橋

しい、そうするとエアコンもほしい、ということになってきて、背をゆっくりたおして寝てみたいとかですね。そんな感じになって、日本の車というのは、どんどん内装がオーバーサービスというかデラックスになった。それがただ1人で楽しむといったものから、2人、家族用へと展開していく訳です。家族がワゴン車で移動することによって、はじめてプライベートな空間を確保される訳です。私もワンボックスをかった方ですが、はじめはスリーボックスという車に乗りましてね、子供をうしろにぼんとほうりもてないということがあって、今はだいぶ楽になりましたが、その時に自分がゆっくりとすわって考えていられるような場所といいますと、車が一番最適の場所なんです。その為には、音楽も聞きたい、そうするといい音が出るような装置がほなげて、前に夫婦で運転していきますと子供はかならずようんです。げーとはいちゃうんです。なぜかといいますと、父親と母親と離れて前後に乗っていると、これは精神的によっちゃうんです。それでワンボックスにしますと酔わないんですよ。これは全く精神的なことなんですよ。

(柳澤) これは即ち、スリーボックスに細分化されたテリトリーでは家族が無意識のうちに成立していないということの

証左ですね。地続きの広いテリトリーが不可欠であるという事ですね。

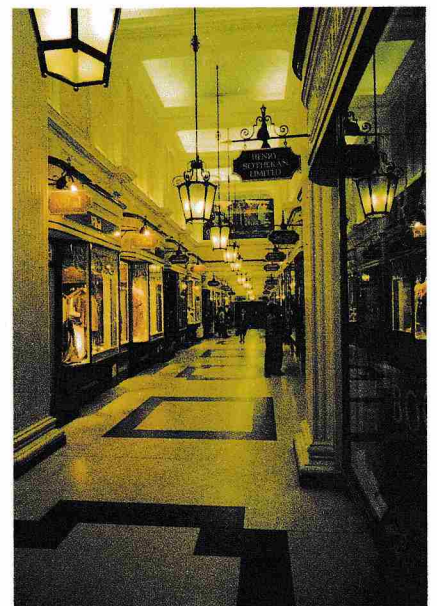
(豊口) それから車の中にカーペットの上等なものをひいて靴脱いで座る。これは移動するときにいいですね。これも日本独特のテリトリーの仕様でしょうかね。

(高橋) 靴を脱ぐと日本では、ウチですよ。

(柳澤) 専有化の一方で、空間とか、権利を共有するといった意識や知恵についてはどうでしょうか。

(高橋) いままでは、いずれにしても稀薄でした。それをなんとか、もう少しおおらかに共有空間をつくっていきたくて、今僕は考えているんですね。だから「ウチ」なるものがあったいいんだろけど、また共有するものというものがなくてはいけないんじゃないかと思うんですよ。これは矛盾するようだけでも一番大事なことではないかと思うんです。「街」というものをやるとき。

(柳澤) 共有の意識や精神について、街並みの中に、その街を象徴するいくつもの作品をつくってこられた永原さん、い



ロンドンのモール ©柳澤

かがですか。

(永原) そうですね。私に関係しました名古屋のメインストリートは3キロあるんですね。広小路通りで、6商店街があるんですけど3キロ全部統一のデザインにする。だけでも6商店街の個性も必要だという問題があって、それには私は「色」が両方を解決できるんじゃないかなという提案をしている一人なんです。今まで広小路通りは、1つのデザインで統一されて、イメージがつけられたんですけど、こんどは、名古屋の通りではなく、世界の通りにしたいという願望があるんですね。ではそのためにどうでしょうか、路面もよくしてもらおう、ポラードについてもこうしてもらいたい。あるいは照明が一番大事ですから、照明はこうしてもらいたいといった具合にそんじょそこらにあるものでなくて、そのメインにしたいというのが彼らのねらいですね。それには、六商店街共通の競争を世界に対して、自分たちのテリトリーを本当のものにしたいという、昔のよき商店街にもどしてもらいたいという願望があるんで

すね。

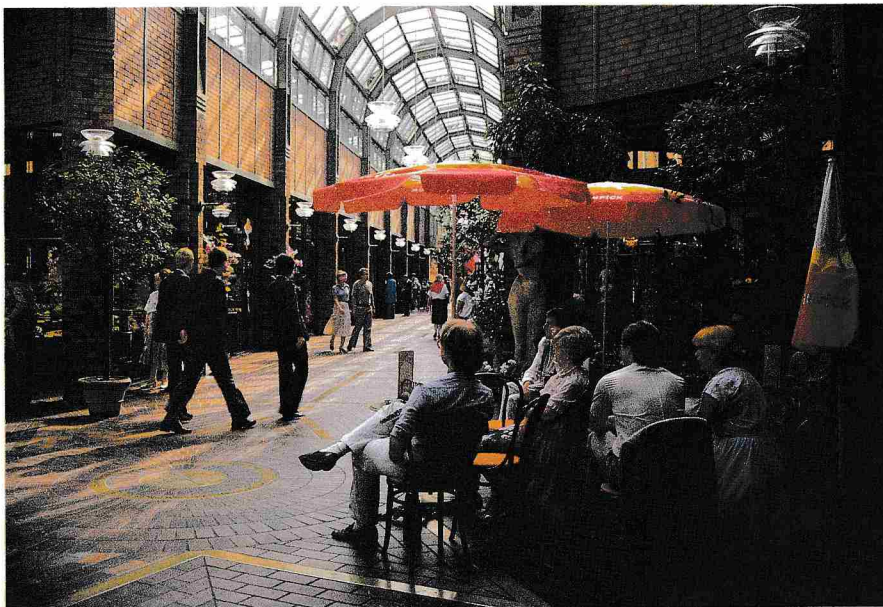
(高橋) 商店街に関してですけどね。そこに住んでいる人が多くいるときは、その商店街に住んでいる人も使うんですね。ところがだんだん栄えてきますと住む人は他に行っちゃう。単なる商売の空間になってしまうわけですね。商売というといすぎですが、もちろん商売だけではなくて、色々な楽しい環境にして、買い物じゃない人も来て楽しんでもらう。これは、みなさん努力してやるんですが、問題は、よそから来る人だけの為にやっているようなことになるわけですよ。住んでれば住んでいる人が使うんです、一緒に。ここが問題なんです。だから帰属意識とか、誇りとか、テリトリーなんかという話しになったときに、商店街に住んでいる人たちがいないと非常に困ったことになってくるのです。やっぱりみんなそこで楽しく使い、楽しくデザインするというか、創りあげて、そして維持して、みんなで使うというときに本物になるんですね。どうも、日本は、銀座をはじめとして、主がいらないんですよ。

(永原) 今、天王州地区というのがあるんです。品川からアクセスする小さな人口島があって、そこを開発してオフィスビルなどの24時間体制のビル群で全部構成されるんですが、居住者もいないと困るんじゃないかということで、住宅公園で住宅棟をつくるんですね。僕はもっと沢山の住居をつくってもらいたいと思うんです。それは、そこに住む人が自分たちの街として、毎日毎日使うんです。事務所に来る人は一回こっきりか、あるいは毎日通うだけで済むから、生活のにおいが全然ないわけね。そうすると作られた映画セットで申し訳ないんです。生きた街にならないんですよ。シエナの町のことをよく話しますが、もう千百何年からずっと今日まであの建物でみんな生活しているわけですよ。そこに住居があるからです。そこでショッピングもできたり観光客も来る。住居がないとよその人も来ないと僕は思うんですよ。そういう生きた街にしてもらいたいということで今デザイン提案をしているんです。

(柳澤) 生活が息づいているところでないと街も活づいてこないですね。

(永原) 生きてこないと思います。日曜だけ来て、ぱっと帰って、ぱっと捨てて、帰るんじゃダメだと思います。

(高橋) やはり、安全性も住んでいる人がいて初めてでてくるんです。人が住んでいなきゃ安全性なんてどっかにふっとんじやうですよ。僕は「安心」ということばに変えました。安全で快適というものを昔から言い続けてきたんですけど、安心の方がより心が安まらなきゃいけない。そうすると人が住んでなきゃいけない。住んでいれば、やっぱり自分たちの街という気持があるし、ストリートウォッチャーもいるわけですから、変なのがいると通報もできる。東京のど真中でもそうでなきゃいけないと思うんですが、経済の論理だけでいくと、人に貸した方が儲



ハンゼフィアテル ©高橋

かることが多い。ここがづらいところですよ。だから税制を少しそこでかえていかなければならない。そして空洞化を防がなければならぬ。また形だけではなく生活、精神的、そういった意味での空洞化を防ぐ為に何とかそこに住むということが必要ではないか。そのためのデザインをしていかなければならないと思っていますね。

そうすると、いきおい屋上なんか、非常に楽しくなってくるはずですよ。日本のビルのペントハウス、スカイライン、それから屋上の不恰好な設備機器が非常によくないといわれて久しいですね。ところが、そのままになっているというのは、やっぱり、そっぽ向いているんですよ。屋上に汚いもの出して、しらんぷりしているのはそこに生活をしてないからで、生活してくると、よく見えてますからね。建築会館から見えているあそこの建物の屋上に緑がある。だんだんあのように入物が増えると素晴らしいし、おそらく、作り方によっては、集落の形になります。ペントハウスが箱型だけではなくて、中世の集落のような景観になってくるのではないかと。そうなるのを望んでいるんですが。

(永原) そう、天王洲ではスカイラインが見えるようにしよう、それからヘリコプターで遊覧して、見渡したときに天王洲に住みたいと思わせるような見え方も作りたいという提案もしているんですよ。

(高橋) でも鳥も喜ぶですよ。

(永原) ええ、鳥が来るような所にしよう、バードサンクチュアリというような大袈裟なことじゃなくてね、鳥がもっと来るような広場を作りたいという話も進めていますね。

(柳澤) 高層化が進む訳ですが、それも単なる面積の積重ねというのではなくて、本来の居住環境であるグラウンドレベルが

環境にとって有効なものにしてゆくことは重要なテーマだと思います。高所の空間性といった点ですね。

(高橋) それから都市と自然を考えますと、環境は、あまりにも人工的すぎます。昔、自然がもつといっぱいあるときには、畏敬の念があって、この木を切っては可哀相という気持ちが、非常に強くはたらく。人工化されてくると、かなり人間の心までもドライになってきて、畏敬の念というのがなくなってくる。この畏敬の念があるときは、もっと物事を大事にしたんですね。トイレにも神様がいたわけですから。今はもう、とんでもないということになってきている。この畏敬の念を、都市の中で作り得ないかということなんですけど、難しくとも出来ませんかでしょうかね。

(永原) それはなくちゃいけないと思いますね。

(豊口) それのひとつの鍵は、川をなく

したということですよ。

(柳澤) 川をなくして、全部、埋めてしまったというのは、大変な失敗だった。

(永原) 失敗、失敗。

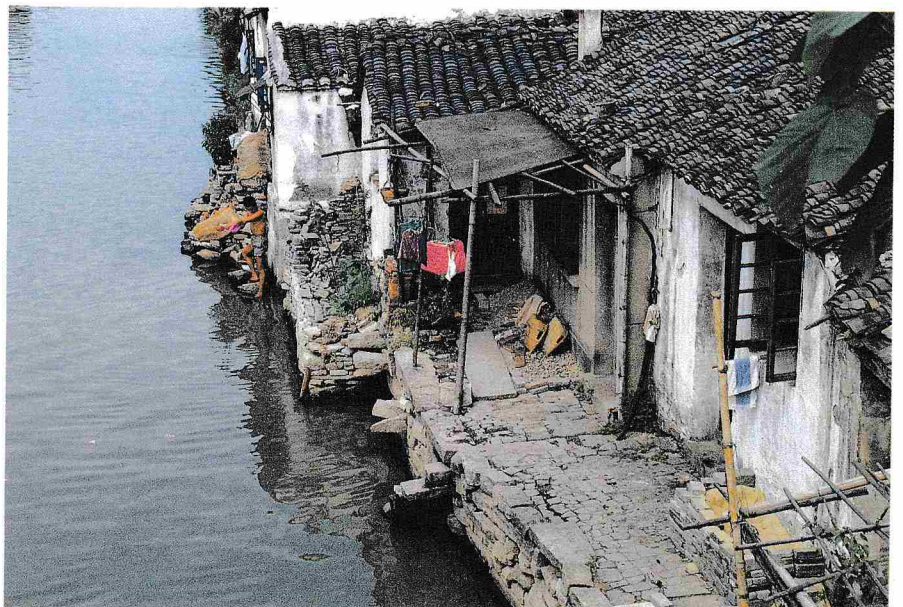
(柳澤) そういう意味で、東京なんか本当に川にめぐまれた都市だったんですが、それが目先の利便性に見事にうめられてしまった。

失敗ですよ。江戸を下敷きにした東京ですけれど、江戸の町というのは、本当に自然の起伏をうまく利用した非常にイメージ豊かな都市だったわけですよ。富士山がどこからも見えて、山の手があり、川の手があり、それぞれに自然と共生するイメージ豊かな街はもう、今の東京にはほとんどなくなってしまったということですよ。

(永原) 昨年7月に、都市開発の人とアメリカを横断したんですよ。中核都市及びデンバー、ピッツバーグね。自然と一番対応しているのが、セントポールでしたね。

(高橋) ミネアポリスの近くですよ。

(永原) そう。サイクリングも容易で、



蘇州の運河沿い ©高橋

もうちょっと行きますとミネトカ湖があって、皆が楽しんでいる。だいたい50万都市ですね。日本でそれができないかなというのが僕のテーマですね。そんな東京になったらいいんですよ。東京だと鎌倉ぐらいじゃないとそういった所はない。でもちょっと遠いんですよ。私、成増に住んでいて光が丘に行ったらこれは全く人工の都市ですね。公園も人工化されていて、もう全然行きたくないですね。困ったなあ、思っているんですが。

(豊口) ゴミの話ですが、住民である以上は自分の使ったその後のゴミを一緒に住んでる仲間として皆できれいにすることにならないのですかね。自分達のゴミですから、皆で一緒に選別して行政の方で収集作業がうまく行くように協力するのが当たり前なんですがね。

税金を納めているんだから、勝手にもっていけ、という感じで出しているとすれば、ますます住んでいる所に対する愛着心がなくなってきますよね。

その辺のうまい民意でもって、ものをうまく処理する方法というのは、もっと話し合われていいと思うんですが、なさ



サンフランシスコの公園 ©柳澤

れていない。ちょっと残念な気がしますね。

(高橋) ピンと紙を分けておくのと一緒に出すのと税金の使われ方が違うかというのを見せてくれないといけません。こちらがやっているんだからコスト、労力がはぶけるわけです。その分税金も他に廻すことができると数字で示せばみんながわかるんですが、どうやったって皆同じじゃないか、税金も同じじゃないかという、皆だらけちゃうんですよ。僕は藤沢に住んでいますけど、住民が当番でゴミの所に立っているんです。変なものもってくとおこられちゃうんですね。「ダメです今日は」ってね、これやっぱり少し厳しい方がいいですね。

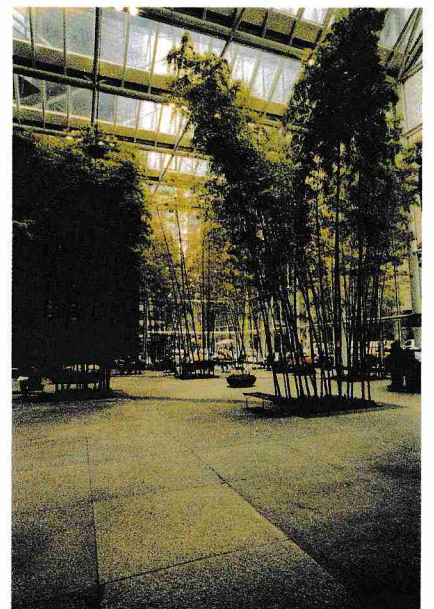
(永原) 日本人ってのは、そういうところがなくてきつくないか。電車の乗り方がそうでしょ、のり、おりと書いてあってもね。僕、ふり返ってみるんだけど、貴婦人らしい人がね、昇り、降りも知らないでねわれ先と乗ってくる。ヨーロッパなら大変なことになるんですよ、もしかしたら引きずりおろされちゃうかもしれない。そういう約束事があるのに日本人という、自分に対する厳しさが無いから、自分だけのイージーゴーイングなんですよ。それが、全てのことに災いしていると思うんです。そういう点では日本はある程度よくない部分を権力で抑えて、厳しくするような方法をとらないとうまくいかないと思う。それを権力じゃなくてね、僕たちがソフトウェアでなんとかできないかと思うのね。しちゃいけないとか、そうじゃなくて、させないようなしくみを深く考えていく必要があると思う。

いつまでも、いつまでもへこたれずにやるということしかないんじゃないかな。

パリがあるのも、厚生行政、交通行政とか電車の乗り降りをきちっとするのに10年かかった。そのくらいの時間をかけ

て本格的にやらないとダメなのかもしれませんね。

(柳澤) 話題を展開しますが、私は香港の街が好きなんです。それは確かに無秩



IBM本社アトリウム ©柳澤

序のようだけど、自然にできあがってくるたくまざる姿に本根の生活の美しさがあると思っています。その特異な、そこにしかない地域性といったものがあるんです。どこにいっても同じデザインが顔を出す金太郎飴のような「バナキュラー」な親しみのある建築や街並みといったものが消滅しつつあるのではないですか。高度情報化社会の今、世界も一揮に狭くなって、世界はすぐにつながってしまう時代です。その時地域が地域である資格が大切になってくると思いますね。さきほどお話に出た世界一の街並みにするには、世界のどこにもないものになくなくてはならないはずですよ。

(高橋) そうです。

(柳澤) どこにもない個性を持った街が本当に誇りあるものとして残したりそれを更にうまく発展していることが大切です。

例えば倉敷というのは、浦辺先生とかが、パブリックな施設の設計も全部まかされているんです。倉敷のいわゆる伝統的なものから現代までを、ひとつの設計思想で貫くことで、倉敷ならではの都市景観を創り上げようという。これは行政の見識の一つだと思うのです。

(永原) 小布施なんかも代表的ですね。いつ行っても、楽しいってよりほっとするという感じがするんですね。栗の時期になると、おいしい栗があるとかね。余談ですけど、おいしい栗あんのアイスクリームがあるんですよ、そういうものを食べたいなあ、じゃ小布施に行こう。それに安心して歩けるなという感じがする。そういう通りというのは必要なんじゃないかなあと思うんです。

(豊口) 栗というのは思い出ありますねえ。パリの11月のシャンゼリゼ通りの焼き栗もおいしいですよ。

(永原) 街路について言うと、僕は、路面そのものは、安全で通行可能な最上の条件を備えていればいいと思う。それはネガティブなものってことね。だけど、

環境という観点でいえば、視覚の中におさまるものが、その空間の雰囲気というものをつくる点で、全部統一的ではなくて、どこか変化のあるデザインが存在しているということが必要だと思います。そういう場合でも、デザイナーが一番心してかからなければならないのは、デザインをしすぎないということが、絶対条件だということです。

(永原) ロンドンのケンジントンパークかハイドックパークで、水鳥が池にいて、そこに子供たちが遊んでいて、ゴミを落とすしちゃいけませんと書いてないけど、「そうしちゃいけないよ」というようなことをいって話しをしてたんですね、その辺が全然違う。それで公園の中に芝生が広がっていて、入ってはいけませんと一言も書いていない。みんな入って楽しんでる。日本だと芝生があると、入ってはいけません。生活の仕方がそもそも違うんですね。いけませんが多すぎるから余計にいけないことが多くなる。

(高橋) 今、イギリスの街にいくと非常にきれいですね。ところが中世から近世

まで道路そのものは汚かったわけです。イザベラ・バードというエジンバラの女性が明治の11年に日本に来て、東北、北陸をまわっています。後日「日本奥地紀行」という本をだしていますが、その中で、新潟へいったらものすごくきれいだって驚いている文章があります。明治の頃はきれいだったわけですね。おそらく為政者がきれいにしろという命令を下していたのかもしれませんが、なにしろ非常にきれいにみがきあげていて、イギリス人がみてびっくりした。ところが、明治からまだ百何年しかたっていないのに、完全に逆転しているわけですよ。

日本はどんどん汚くなっている。江戸もきれいだったというのが一説にはあるでしょう。新潟もきれいだった。その新潟のきれいさは、ゴミを落としたり、だれかが来て拾っちゃうというようなね。だから、ゴミなんか落とせないなんてことを、びっくりしちゃってましたね。エジンバラの役人に教えてあげたいなんてことをイザベラ・バードがいつかしている。

そうすると、この百年というのは、いったい何なのだろうか、日本はこんなにおかしくなったのかと常に思っちゃうんですよね。

ロンドンでもパリでも、19世紀初め頃非常に汚かったわけですが、まだその頃までは、それをパリなんか19世紀中頃オースマンの大改造があるんですけど、それ以前という中世の町を引きずり非常に汚くて、汚物もどどん外に捨てていたと、それがこの百年でなぜこんなに良くなって、日本がこの百年でなぜ悪くなったか、このへん非常に興味があるわけですね。

(柳澤) 街のつくりもさることながら、住み手側のモラルなど、意識の問題が大きいです。

(高橋) 道路の清掃に関しても、自分のテリトリー意識が全くなくなっちゃって、



税金を出しているんだから役所が掃除してくれるのは当然じゃないとか、子供にさせようかと思ったら塾が忙しいと言われるので親がするしかないとか、何かもっと自然な状態、せいぜい石神井公園くらいですかね、しかし狭すぎるんですね。もっとサイクリングしたり、ポートしたり、そういう自然と共生しながら自分たちで都市生活を楽しめるような都市、東京が一番ほしいのはそれじゃないかなという気がします。

(柳澤) どうしても自然というものはなくてはいけない。自然の一員でしかない人間の生活ですからね。都市と自然という観点で見たときに、都市の中に於ける自然の象徴としての「公園」のあり方や質についてはどうでしょうか。どうも我が国は非常におくれている。西欧の公園のアクティビティは本当に高いものがありますね。公園をつくって行く制度や、それを管理する意識や、利用者の使い方の意識など、どれをとっても非常に低いと思うんです。

かつて、立川の仕事で区画道路のデザインをしたんです。300分の縮尺で1mm角の格子を画いていたら、どこをデザインしたんですかというから、いやこれがそうです。格子の目しか画かれてないんですかっていうんですね。スーパーか何かの広告で、デザインセーターってのがあって、そこでは要するに何か模様がなければデザインしたと思わないんですよ。僕はデザイナーとしてそれは、避けていくひとつの条件であると思うんです。環境はデザインしすぎると、いろんな問題が起こってしまうと思います。

(豊口) あの標準化というのは、こわいなど思うんです。昔の駅というのは、個性がありましたね。

(永原) 街は新しくできた駅から発生していくという、駅の意味があります。今は標準化されてしまって、駅はみんな同

じになってしまった。新しい駅舎を作る場合に、その土地に住んで、その土地を本当によく知っている建築家や、関係者がデザインするとか、街の人たちと一緒に検討しながらつくっていく。というふうな余裕がほしいものですね。特に地下街なんか全部同じですからね。名古屋でお茶を飲んでたのか、大阪で飲んでたのか、浜松で飲んでたのか、時計みて、あっけねえ、これは大阪だったと慌てるといったことがあるんですがね、これもやっぱり非常に生活環境をおかしくしているもののひとつです。

(高橋) 駅舎というものが単独に残っている場合というのは、かなり個性化がはかれますが、今は、複合化されてきて、一つのビル中に入り複合ビルの中には、ショッピングセンターありホテルありで駅がどこにあるのかわからなくなってしまうという現象があります。

複合化重層化されたときの危険性というのは、非常に大きいものがあると思います。

(柳澤) 確かに、機能の複合化とか多重化、そういった時代の背景が、単一機能がもっていた個性というものをだんだんと変えてきている。既ち非常に身近な所から街をつくっていかねばならない一方、それとは対極の大きな都市づくりという面からの見方も重要である。両方からのアプローチの交点と調和ある新しい環境をつくっていくことが重要課題ですね。

ここで、実際に街並みを構成しているストリートファニチュアについて光や色、形、材質などといった具体的視点でお話下さい。

(高橋) この間看板を調べてみました。銀座中央通り、並木通り、プラームスの小径、元町とかね。いろいろ調べてみたんですが、非常におもしろいですね。看板全部データとってたら文字看板が全体の98%位ですよ。法的には占用物の設置基

準と広告物の条例がありまして、それに合わせますと歩道上も1m以内ならいくらでもいいんですよ、上は。どうしても看板景観になってしまう。法規を変えないと、常に日本はあれになっちゃいますよ。それに行燈看板。夜の方が光を出すと目立つということで、行燈看板で70%と。こうヨーロッパでよく見かける形のね、字じゃなくて形のしかもユニークな、みんなが「はっ」と思うような。本当の意味であれば看板ですよ。みんなが「ああ、いいなあ」というですからよく見てくれる。これは、1.8%しかありませんよ。日本の街並は、文字看板にもう占領されているわけですよ。それでも、大型というのがあるんですよ、長いやつが。これが意味もないのに長くつけているのが、はっきり言うと銀行、証券会社。(笑)



メルクの街並み ©柳澤

何とか銀行で、たった数文字でしょう。それが、チョッチョッとあって、あとはずーと長いんですよ。真っ赤な色が多い。パースペクティブにみると、それしか見えないんですね。何しろ建築家が一生懸命建築のデザインをしても、街をパースペクティブに見たとき看板に邪魔されて見えない。

看板のデザイナーになった方が街並を変える近道である。逆説的ですがね。(笑)

(永原) 今、天王州地区では、行燈看板を一切やめて下さいといっている。その代わり銀行へ誘導する誘導サインは考えましょう。おもしろい誘導サインを提案

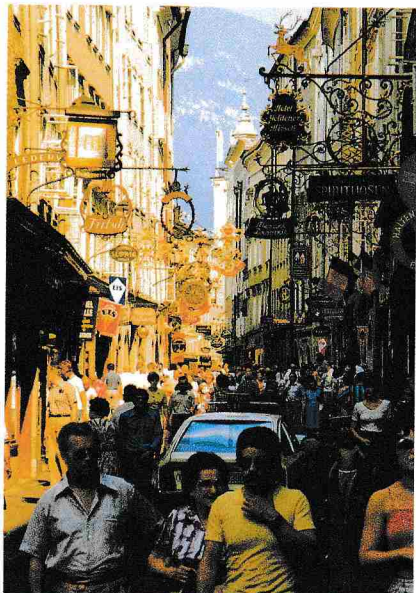
していること。昨日、新潟に大きな開発ビルができてね。そこに入居の信託銀行が行燈看板をやりたい。それだけは勘弁して下さいといっている。ではどうしたら良いかと考え中なんです、それがもう目一杯の開発だから、建物と敷地の間に余裕が全くない。秘策を考慮中なんです。ほんとに行燈看板は建築を駄目にしてしまいます。

(永原) 明る過ぎるんですよ。

(永原) 名古屋の例ですけど、車道というのは照度基準があって、平均30ルクス位、歩道の方はその倍位欲しいわけなんです、倍になっても店舗の方は、あんまり効果がないんですよ。それならば、車道照明の方をもう少し交通規制にかからない程度で暗くできないかという話をしているんです。全体に「ワー」というほど明るい照明ではなくて適度な光の連続感で通りが構成できたらと思っています。皆明る過ぎるんですよ。

(高橋) 明る過ぎますね。

(永原) ヨーロッパに行きますと、おそらく10ルクスもないんじゃないかと思えますよ。それで、それぞれの雰囲気



ゲトライデ通り ©柳澤

作っているわけですよ、しっとり。

(永原) 香港も同類ですよ。ヨーロッパにはそういうのはないですかね。

(高橋) ザルツブルグのゲトライデ通りのような美しさがむしろアイデンティティである。

(柳澤) あの看板には照明なんかしかないでしょう。夕方むしろショーウィンドウがね、夜明るくなる。

(高橋) そうです。

(高橋) それも今度照明度との関係も出てきますね。日本の商店街、特にアーケード街は、300ルクスはあります明る過ぎます。

(柳澤) ヨーロッパに行つての経験ですと、夕方から暮れて行く黄昏の光の変化をヨーロッパの人は楽しんでいる。窓から斜陽がさし込んで、インテリアを色づかせている。日本の場合、ぱっと一揮に明るくなってしまふ。室内の照明もさることながら、看板が一気に明るくなってしまつて、夕暮れの光を楽しむ情緒もないんです。日本の看板の主張は強烈なものです。

(高橋) ええ、シルエットがいいんですよ。人間のシルエットになって見えるのが最高にいいんですよ。日本はシルエットがなくて、全部もろに見えるんです。われわれも、というから悪循環ですよ。

(永原) ほんとに悪い習慣がついたというふうに思いますね。

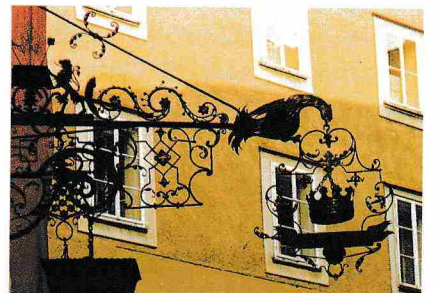
(柳澤) 色とか材料というような点では、どう思われますでしょうかね。

(高橋) 僕はね、今までやってきたのは、色はベースの色としておさえましょうと、ずっとやって来たんですよ。おさえるにしても、茶系統、黒系統、白系統位にしましょうなんて、系統でやったんです。商品が引き立つ方がいいじゃないかってね。それから、来街者が引き立つ方がいいじゃないかってね。

ところが数年前、サンディエゴのホー

トンプラザを見に行ったら、47種類の色がワーと着いているでしょ。それはそれで、あそこに行くと楽しくなっちゃうわけですね。これいったい何だろうって。

僕はふと気がついたんです。あれは環境を売ってるなって、私は商品売るためには、街の色は抑えた方がいいと思っているんですがホートンプラザの場合環境そのものも色で売っているのではないか。それが、かなりディズニーランド的指向でもあるし、アメリカ人の底抜けに明るい、またカリフォルニアのドライな気候にあっているんじゃないかという気



クレモスのアイアンワークの看板 ©柳澤

がしたんですよ。日本であれやったら、疲れるでしょうね。面白いですがね。

(永原) う〜ん。

(高橋) ある場所に限ってやればいいんじゃないかな。

(永原) ディズニーに憧れて一億人もの人が行くくらいですから、みんなああいうものを欲しがっていると思う。ただ、昼も夜もね。

(永原) それがいいとおもっている。

(高橋) とにかく明るい商店街なんです。それなりに……(笑)

(柳澤) いかにも、その明るい光に蛾が集まるようにね。(笑)

(高橋) そうそう。

(柳澤) 本来、影があったり闇があるから、光の効果があるわけですね。何か、さっき行った海みたいな空間でね、広がっていくような所には可能性があると思

うんです。閉ざされた空間の真中、中にはいったら別世界ってあるでしょ。

(高橋) 外側は、今までのやり方で、中に入ったら別世界ってやり方ありますね。

(永原) あります。

(高橋) 中に入るととたんに沢山色が使われている。

(永原) 悪くはないんだけど。

(高橋) 困っとならばいいんですよ。(笑)

(永原) いつだったか5、6年前かな、北から南まで道路の写真をとりに歩いたんです。最終的に結論が出たんです。それはネガティブという言葉がね。構成素材は自然色が一番目だたなくて良い。それも茶色よりは黒っぽいもの、これが一番ふさわしい。寸法とか仕上げも沢山の例を写真に撮って観た結論でした。とにかく、人間の脚から受ける感覚というのは、自然の土とか石から受けるのが一番感じがいいわけだそうなんです。

(柳澤) ヨーロッパも、あの徹底的に石で囲まれた空間ですね。

(永原) そうですね。

(柳澤) ですから、多少何かきつい色があっても、それはかえって許されてしまう。

(永原) アクセントとしてですね。

(豊口) 元町も最初は、色々指導がありましたね。タイルという話もあったんです。僕は、タイルはやめてもらいたい、とにかく自然の花崗石を張ってくれといった。四季の変化で、雨が降ったり、曇ったり、石ですと表情が変わるんですね。

(柳澤) 変わりますね。

(豊口) それで、やっぱり日本には四季があるんだから、道路の表情も変えた方がいい。それは一番自然な人間環境だからという訳で、予算の関係もありましたが、石になった。よかったなと思います。しかもグレーですからね。

(高橋) そうですね。

(豊口) 雨が降って、水を含んで「シート」となった自然の石っていいですよ。タイルはそうなりませんからね。水を弾いてしまいますから。

(柳澤) 互屋根なんかは、同じように雨をうけつけないという訳ではなくて、ある程度ちょっと吸い込むというところに有情な表情というものを持ち合わせた材料だと思うんです。しかし最近では一気に人工的な硬質な材料にとって換わっているというのも、都市の中の表情を変えている一つの原因だと思えますし、外壁材なんかもそうですよね。

(永原) 固いですね。近所には、マンション風のアパートが多いんですけど、みんな白タイルだけ、犬連れて歩いていると気が引けちゃうんだろね。こう……やるじゃないですか。

(高橋) 先程、永原さんは目立たないというキーワード的なことをおっしゃいましたね。ところが、今、日本の中でアイデンティティーとかユニークだとか、個性とかね、かなり短絡的で目立つ方になっているんですよ。それをもてはやすジャーナリズムがある。一方では、いいんですけど、一方では非常にいけないことをやっているのです。そうすると、目立たなくて本当にいいものというものを検証、表彰する何かを創らなくてははいけませんね。そうしないと、目立たなくていいものは埋もれていってしまっているのです。これよくないことですよ。なんか、いやらしく目立つものだけが、もてはやされている。

(柳澤) これは、日本建築美術工芸協会賞でなくてはいけないんですね。

(高橋) そういうものを発掘してね。この協会でちゃんと光をあてたい。

(柳澤) そういう意味があります。

(高橋) それやらないと駄目ですね。

(永原) もう一つの例に、東京百選、日本百選という道路があります。それらの

一部のものは安いタイルの混色模様で、カリカリでね。照明のデザインも悪い、看板やサインも全然良くない。それが日本道路百選となっているでしょ。そういう基準は誰が決めたのかね。

疑問があるんですよ、最近道路に興味があつて色々見ていると、疑問になるんですよ。

(豊口) ストリートファニチュアと呼ばれて無理に個性を主張させなければいけないと思うのは、おかしいのであって、本来あれは主張しちゃいけないものなんだと思うんです。そのへんを取り違えると非常に住みにくい、歩みにくい街になるのですよ。

(柳澤) まだまだお話は尽きないどころか、核心に迫るお話の途中のようにも思いますが今日の座談会はこれで終了させていただきます。広報委員会といたしましては、この様な機会を継続的に設けて会員の方々の持ち寄る種々の問題をとり上げて行きたいと思えます。そしてそれらの発言が当協会を通じて、必ずや社会に一石を投ずる影響を与えて行くものと確信しております。本日はお忙しいところ長時間御苦勞様でした。

©柳澤：柳澤孝彦撮影

©高橋：高橋志保彦撮影



建築家
ISAO KODAMA
小玉 功
小玉功・都市建築設計室
世田谷区太子堂4-30-29
八千代ビル4F
TEL.03-3411-1613

巴里の風流譚

「華の都巴里」に滞在したのは、もうかれこれ20年前のことになる。近代建築思潮の流れの中で、コルビュジェを中心とするCIAM（近代建築国際会議）が崩壊し、それを引き継ぐ形で「TEAM 10」が誕生した。その主流メンバーの1人であったジョルジュ・キャンディリスのビューローにデザイナーとして勤務した。事務所は、ポン・ヌッフに近いレ・ドフィンの古い巴里の街並みを残す場所に存った。

当時の巴里には、今程多くの日本人は居なかったし、また今程多くの観光客も訪ずれることもなく、まだまだ「憧れの都巴里」ではあった。

そんな巴里で、私が今でも鮮明に記憶

していることがある。私が住んでいたサンジェルマンの古いアパートの屋根裏部屋のドーマから、街行く人々を何気無く眺めていると、3人の浮浪者が通りを隔てた向い側の建物の角で宴を張っていた。古新聞紙とダンボールを丁寧に敷き、何年も履きこんだと思われる靴をきちっと揃え、素足がのぞく破れた靴下を前にあぐらを組んでいろいろな御馳走[?]を並べていた。宴は、ボスとおぼしき男が真中に陣取り、おもむるに2/3程入ったぶどう酒の白を取り出し、それを仲間に分け注ぎ、皆で乾杯をやって後、魚を、ポケットから取り出したナイフとフォークを使ってうまく食べて出した。次いで赤ワインで肉と進み、最後に一体どこか

ら持ち込んだのかデザートまで食したではないか。正に、私も余り経験のないフルコースそのものであった。

巴里の浮浪者の多さと、道ばたの犬の糞の多さに少々辟易していた私にとって、この小1時間に渡る光景は、私を大になごませてくれたと同時に、たとえ浮浪者といえどもフランス人の気位と気骨を垣間見たような気がしてすっかり感じ入ってしまった。

そんな昔の出来事が昨日の様に想い出されるのであるが、古き良き時代を忍^{よす}びさせる風流譚は、今の巴里では多分見当たらないのではなからうか……。





版画家・デザイナー
TAEKO TAKABE
高部 多恵子
横浜市緑区あざみ野4-16-43
TEL.045-901-2009

竹の不思議

私は竹が好きで、よく近くの竹やぶに行ってみる。忙しい仕事をのがれて、何も考えず、枯れた竹の葉のじゅうたんの上を、ふわふわと歩いたり、その上に坐ったりしていると、いつの間にか元気が出てきて、竹のささやきが聞こえてくる。竹の精のせいだろうか。

先月、京都の嵯峨野に行ってみた。この竹は、また格別に美しい。

竹やぶの中に入って、空を見上げると、サヤサヤと風にそよぐ竹の葉が、銀色にかがやいて、千変万化するそのさまは、じつに面白い。まるで小宇宙を見ているようである。とくに、雨上りなどは、幻想的でよい。

昔の人は、このような竹やぶの中で、かぐや姫を見たのではないだろうか。

数多ある竹の中でも、私は孟宗竹が好きである。あの空までとどかんばかりの勢いと、風に大きくしなる、あのカーブする竹の美しさと強さは、天下一品だ。

わが家にも、^{はちく}淡竹、^{きこつ}亀甲竹、^{ダイミョウ}大名竹など何種類かの竹を植えているが、昨日まで見当らなかったところに、翌朝になってみると、1メートルもの、生まれたばかりのみずみずしい竹が、すくくと立ち出でていることがある。

一夜にしてである。

その生命力たるや、凄いものがある。いったいその力は、どこからきたのだろうか。

地の底からだろうか？

天空からだろうか？

土の中から、ひょっこり頭を出してきた竹の子のかわいらしさからは、とても想像がつかない。

いづれにしても、竹には不思議な、そして大きな力が潜んでいることにまちがいないのだ。

この私に迫る自然の大きな力を、何とか私の創作に生かせないものかと思う。





油絵・造形・壁画家
PAULA G SCHUMANN
ポーラ・G・シューマン
1605 7th St.N.W Wash D.C 20001
TEL.202-745-0349

文化庁への報告書

私の日本における3か月半は、調査研究の日々でした。調査研究は文化と芸術であります。

私の訪日の目標は三つありました。

第一は、日本とそして日本人およびその習慣を学ぶことでした。私の全くといっていいほど、知らなかった神秘的な国についてより多く学習する機会を活用することでした。

第二は伝統的な日本芸術を手近なところで鑑賞したいと欲していました。これは絵画、陶器、版画のみならず、神社、仏閣の建築、能、歌舞伎、そして私ごとくに重点を置いた日本庭園の美学が含まれています。

第三は日本における現代芸術家集団を考察する機会をもちたいと思っていました。私は今日活動している芸術家たちにお目にかかり、現代の日本の芸術家たちの作品がどれだけ伝統的芸術の影響を受けているのか、あるいは殆ど受けていないのか観察することに興味をもっています。私は、私と経歴や仕事場の同じような立場にいる芸術家にお会いし、環境の共通性もしくは差異について調べたいと思っていました。

私の日本滞在は短期間ではありましたが、日本の人々の生活の内部をたくさん知ることができました。

今回、日本で時を過ごしたことは幾つかの理由から大事なことでありました。日本に着いた当初一番際立ったのは、日常生活の文化の日本と私の国との相違でありました。しかし時間とともに、だんだん両者の類似性についてもわかるようになりました。この国の物事の感じ方やリズムに順応してくるうちに、私は日本社会をつぶさに観察することが可能になり始めたのです。私は日本という国は、多重的な層をひとつひとつはがして行くことによって体験する場所なのだと思います。

芸術、歴史、宗教そして哲学がこの国

の豊かな文化のなかで絡み合っているのので、その微妙な持ち味がわかり始めるのに時間が掛かりました。この種の相互作用こそは、異なるもの、新しいものを理解するのにしばしば障害となる画一的な見方を取り去るのに役立つと信じております。

私にとって最も印象深かったのは、新しいものと古いものがどのように両立して存在しているかでありました。新旧の対照は私に刺激を与え、これこそが日本の中で最も興味深い局面でした。

はっきりした実例は、建築です。殆ど超現実ともいえる近代建築やネオンと神社や仏閣が対照的な光景を作っています。或は古い市場や店舗が、オフィスビルとデパートの間を埋めているのです。

建築物が作り出す構図が、対照的であるだけではありません。この対照性こそが珍しい取り合わせを示す日本の生活様式の代表例なのです。古いものが、現代生活のテンポの速さをバランスさせているのです。そして、古いものが日本の現代生活にある種の精神的な資質を与えているのです。

心の資質こそが、日本人にいにしえとのつながりを常に思い起こさせているのです。私は日本の日常生活を観察し体験することによって、日本の豊かな文化史をかいま見たような気がしています。

日本の文化をより深く理解する機会を与えてくれたもののひとつとして、お茶会への出席があります。

この儀式のもつ簡素と美は、それぞれの所作の象徴的表現を積み重ねることによって、対照性を作り出しています。お茶会は現代のみならず古きものについても尊重しなければならぬことを教えています。私は、茶道具に心を惹かれました。素朴な質と自然な形、とりわけ茶碗は日本の美学の基本のひとつを示す代表例です。私はこの種の茶道具を日本の数々の美術館で鑑賞することができました。そして茶道具は日本美術の最も美しく興味深いものであることを知りました。

日本の食物の調理法もまた日本文化の洞察に満ちた要素の一例であります。私

は食物を絵画や彫刻のように表現したり、整えたりすることによって食物に視覚的素晴らしさを与えるやり方に絶えず驚きの目をみはっていました。色彩、構成、配合は料理の材料そのものと同じ位大事なのです。

この表現は、食物を尊重し、それがどこの産物かを重視するある種の食物に対する敬意の念を創造しているのです。

私は、いくつかの日本料理を食べる機会がありました。そして日本のうどんやそばの歴史を学んだり、寿司屋の板前が美しい造形をするのを見たり、伝統的な日本の料亭の静けさを経験したりしました。

私の日本滞在中、多くの博物館や美術館を訪れたり、伝統美術の数々を見学しました。私にとって一番興味を惹かれ心を打たれたもののひとつは、浮世絵の版画です。

浮世絵は、古典文学にある日常生活のひとこまや物語を描写することによって、過去を凶解しています。浮世絵観賞によって、古い時代に人々はどんな着物をつけ、どんな種類の仕事をし、そして一般にどんな生活をしていたかを知りました。

絵画は、当時のファッションやスタイルを表示する尺度でもあります。数々の有名な浮世絵は、日本の有名な光景を描写しており、私は実際にはどんな景色だったのかを想像したりしました。

また浮世絵観賞の私の楽しみのひとつは、日本人の生活や文化のある局面は昔と殆ど変わっていないことを見出すことでした。浮世絵にあるような風習や衣服は、今日の日本の中で発見できるのです。浮世絵画家たちは人々の生活と時代の記録者であり、彼らの描いた絵はまた「いにしえ」を現代につなぐ結び目なのです。

墨絵は私にとって、日本の美学とは何かを定義する美術の型のひとつの実例なのです。簡素で力強く、そして清浄な筆の運びは描写されるイメージと同様に重要であります。

黒い墨と白い紙の対照性を用いる墨絵は、落ち着きがあり、しかも力量感にあ

ふれ、かつ繊細でさえあります。一本の筆跡で多くの情緒を表現することが可能です。

絵画は実際の画材に対して画家がある種の精神的な解釈をすることが許される最小限の資質を維持しています。目に映る形は花とか木のように単純なものであっても、画家が色を塗ったり紙の上に形づくる手法は、花や木のもつ意味を重層的なものにするのです。

私は画家として、水墨画という媒体のもつ表現力に富んだ資質に大変心を惹きつけられたのです。

日本庭園は多分日本の美学を語る上で最もよい実例です。とりわけ石の庭はそういえます。お茶会の茶碗や茶道具で前に述べましたが、石の庭からも清浄さと究極の簡素さを感じます。私にとって石の庭は大変精神的なおもむきがあり、それは大勢の日本の芸術家たちの労作の結晶ではないかと思われまふ。石の庭は視覚的には単純なものです。しかし、そこに展開されている細工は魂と瞑想を訴えているのです。美しい自然の材料と石と石の間のスペースの組み合わせは重要な形式美であります。形と材料の純粋性こそは日本芸術の中で私が最も感銘した美の感覚です。それは墨絵や石庭のみならず、庭や茶室に使われている陶器や石といったものからも感じとれます。

私はこうした感覚の微妙な味と偉大な情緒的な資質に惹きつけられました。

私は伝統的な芸術が保存されていることに感銘を受けました。日本ではいたるところで伝統が永久に保存され、歴史や文化が生きたまま残っています。伝統技術は代々受け継がれているのです。

大切なのは修行です。美術、工芸そして歌舞伎や能のような舞台芸術の中に、このような修行の結晶を見いだしました。これらの芸術はすべて過去を生きたまま保存するひとつの方法であり、またそれらは日本人の生活様式の一部になっているのです。

これまで述べた伝統的な感覚は、多くの現代芸術家にも影響を与えているように思われます。日本滞在中、私はいろいろ

るな分野で様々な形で制作活動をしている人たちに会いました。ある芸術家たちは伝統にとっても近いやり方をし、そして他の芸術家たちは、いろいろな点で伝統から出発するやり方をしており、そんなやり方について私はとても興味を惹かれました。とりわけ版画や陶芸をやっている人々は、歴史の感覚をもっているように見受けられます。この人たちは歴史とのつながりを道具として、より現代的に機能するよう操作する術を心得ているものとお見受けしました。

私は特に陶芸部門の作品に心を惹かれています。陶芸は工芸と彫刻の交錯したものだと思います。

多くの陶芸に携わる芸術家たちは、日本の陶芸の伝統についての知識と洞察力をはっきりと持って仕事をしています。しかも彼らは、これをパラメーターとしてではなく、むしろ出発点として利用しているのです。伝統をパラメーターとして使うと、ときおり新しきものの創造性を閉じ込めてしまうこととなります。芸術における原型的表現は、現代の我々の環境と何らかの関連をつけて解釈されるべきなのです。過去の影響を強く受けている反面で、現代の芸術家は今日の世界を否定することは不可能であり、今日の世界を語らざるを得ないのです。

以上は私が日本において観賞した幾つかの作品に対する批評です。

私は芸術家は過去を単純にくりかえすのでなく、過去というものを自分たち自身の作風を見つける道具として使わなければならないのだと考えております。

日本の建築は、私のような考えがとも見事に具現されている分野だといえましょう。日本の現代建築は、素晴らしく成功している分野だと思っております。日本建築美術工芸協会(A.A.C.A.)を通じて私は建築家、設計者、施工者にお会いし、この分野で仕事をしている人々の思想や哲学をかなり包括的に概観することができました。過去と現代のニーズへの配慮が結合され、建築の景観のデザインに心を惹きつける独創性を発揮する独特の手法を作り出しているのです。日本旅行で、私は古い家屋、お寺、神社の様々な形の伝統的な建築を見ることができました。これらの構造が周囲の環境や風景とどう関係をもっているかを観察することに興味を持ったのです。このような経験は私に対し現代の建築物を見る目を養ってくれたのです。

日本の現代芸術の状況はどうなっているのか調査することは、私にとって最も興味深いことでありました。私のような若い芸術家、すなわち画家、彫刻家、ま



大塚オーミ陶業株式会社工場にて

たは音楽や舞踊に携わる芸術家にお会いする機会ができたのは、私の日本滞在日程の終わりの頃でありました。

私のたった一つ心残りだったのは、日本における現代芸術集団がどのような活動をし、どのようにお互いに影響し合っているのか、その感触を得る時間があまりなかったことです。しかし一度だけ様々な分野の様々な流派の人々が協同して仕事をする場面に遭遇する機会があり、私の心はときめきました。それはダンス、演劇、絵画、彫刻、そして音楽を総合してプロデュースしたパフォーマンスで、とても生き生きとしていました。パフォーマンスという分野は、狭い定義をしてはなりませんし、また簡単にパフォーマンスとは何んぞやを定義できるものではありません。この分野は芸術家たちが情熱をかきたて自分のやっている仕事の限界を突き破ろうとする試みが許されるのです。

私は、日本の芸術家たちが日本とりわけ東京の狭い土地の問題にうまく対処しているのには、終始、驚嘆させられました。私は土地の狭さというものが、彼らの制作活動に何らかの効果をもたらし、直接的な影響を与えているのだと感じました。土地の制約というものはアメリカ合衆国においても、おおむね存在していますが、日本ほど極端ではありません。日本の土地の狭さという問題はまた、芸術家たちがやろうとしている仕事に直接的な制約を与えています。土地価格が高いがゆえに、商業主義のギャラリー以外はないのです。

アメリカ合衆国やヨーロッパにおいては、芸術家たちの集合場所が沢山あって、より実験的な仕事や前衛的な(Avant Garde)仕事を勇気づけてくれているのです。このようにして提供された場所は、ギャラリーのもう一つの形態であり、通常非営利であり、国もしくは地方公共団体からの補助金または個人からの寄付によって賄われているのです。

このようなやり方こそは、芸術家たちが集まり、新しいアイデアを刺激するのに必要な対話を創り出すのです。

私は、日本にこのようなタイプの集合場所がもっとも必要だと思います。私は米国でこのようなタイプの芸術家のための広場作りに関与し、ワシントンD.C.では、そのための基金集めのメンバーとなっています。

私は、今回のような経験と意見交換はとても大切なことだと思います。今回の経験と意見交換によって、私のこれまで述べたような日本体験談が生まれたのですから。

同様に私の日本での経験は私にとって、とても大切なものになりました。私は今回の文化交流に参加する機会を与えられ、こうした機会は私自身及び日本で私のお会いした人々双方にいくつかの点で、実りをもたらすものと考えております。外国の芸術家との対話や交流は大変稀なことであり私はこの機会を大変多とするものであります。

私の見た伝統と現代を結合させた芸術は、私が私のスタジオに戻ってのち、私の作品に強い影響を与えることであります。

私は日本で得た沢山の事柄や情報を消化するには、もう少し時間が掛かると思いますが、すでにここで得た経験は、私が「私の視覚的な単語集」(My visual Vocabulary)と名づけているものを、より厚くするのに役立っているのです。このような語彙は永遠に進展するものであり、私の作品の為の芸術的な資源を引き出す源泉なのです。

私は、日本国文化庁と日本建築美術工芸協会に対し今回の機会を与えて下さったことに感謝するものであります。芸術家にとって機会というものは、そうしばしば得られない商品なのです。この複雑な世界に、芸術家は一人で生きていることはできないのです。今回の研究助成金によって、私は機会という贈り物を与えられ、日本の芸術や文化の調査のみならず、私は個人的な日本探訪の機会を持ちました。とても優遇され、私はより開かれた気持ちで私の日本体験から沢山のことを吸収することができました。



京都清水寺にて

私は、日本建築美術工芸協会の会員の方々に特段の感謝の意を表します。これらの方々は私と一緒に時間を過ごされ、私の芸術活動を助けて下さいました。

芦原義信先生、高部多恵子氏、柳澤孝彦氏、佐藤良行氏、玉見満氏、絹谷幸二氏、宇津野和俊氏が含まれております。そしてまた、歌川令三氏、歌川榮子氏ご夫妻にはとりわけお世話になりました。彼らは私に寛大さを示し、私の日本滞在中、家にでもいるような気持ちにして下さいました。

また、中川幸成氏、梶谷保子氏のあたたかい友情に感謝いたします。そして、素晴らしいホストになって日本における私の時間を豊かなものにして下さったそれぞれの方々に感謝する次第であります。

以上

(歌川令三 訳)

社団法人 日本建築美術工芸協会 第1回協会賞・同特別賞締切らる

この度、協会目的に則り、建築家、美術家、工芸家その他の人々の連携と協力によって優れた芸術的環境（建築、庭園インテリア、その他を含む）を創造した或は優れた芸術的環境に関し多大な業績のあった個人又はグループを次により表彰し賞を授与することにいたしました。

(社)日本建築美術工芸協会賞：優れた芸術的環境（建築、庭園、インテリアその他を含む）を創造した個人又はグループ
(社)日本建築美術工芸協会特別賞：優れた芸術的環境の創造に関し多大な業績のあった個人又はグループ。

賞の選考委員：嘉門安雄氏(委員長)、
栄久庵憲司氏(副委員長)、会田雄亮氏、
宮本忠長氏、小林治人氏、三輪正弘氏。
応募件数：95件
表彰式：11月22日(金) 午後5時半より
建築会館ホールにて。賞牌は向井良吉氏の
デザインによる。

東京都新庁舎美術工芸作品見学会

平成3年6月21日(金)午後3時より協会
会員53名の参加を得ての見学会となった。
東京都財務局の中村課長他の方々から
懇切丁寧な説明と案内を受け見学。通常
は見られない作品もあって約2時間堪能
したが、大建築にも圧倒されました。芦
原会長の参加もあって見学会は成果を
あげました。写真提供はSP建材エージェ
ンシーです。

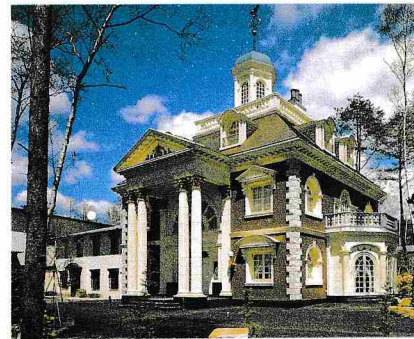


ラ・メゾン・ヴィニョーラの完成

(株)ゼネラルメタルワークでは、ルネッサンス建築に偉大な足跡を残したジャコモ・パロツィオ・ヴィニョーラの作風を模して長野県茅野市（蓼科高原）にモ



デルハウスを建設した。会社の職人をイタリアに長期間派遣研修させ、その成果をもって完成したもの。一般にオープンしています。写真参考。

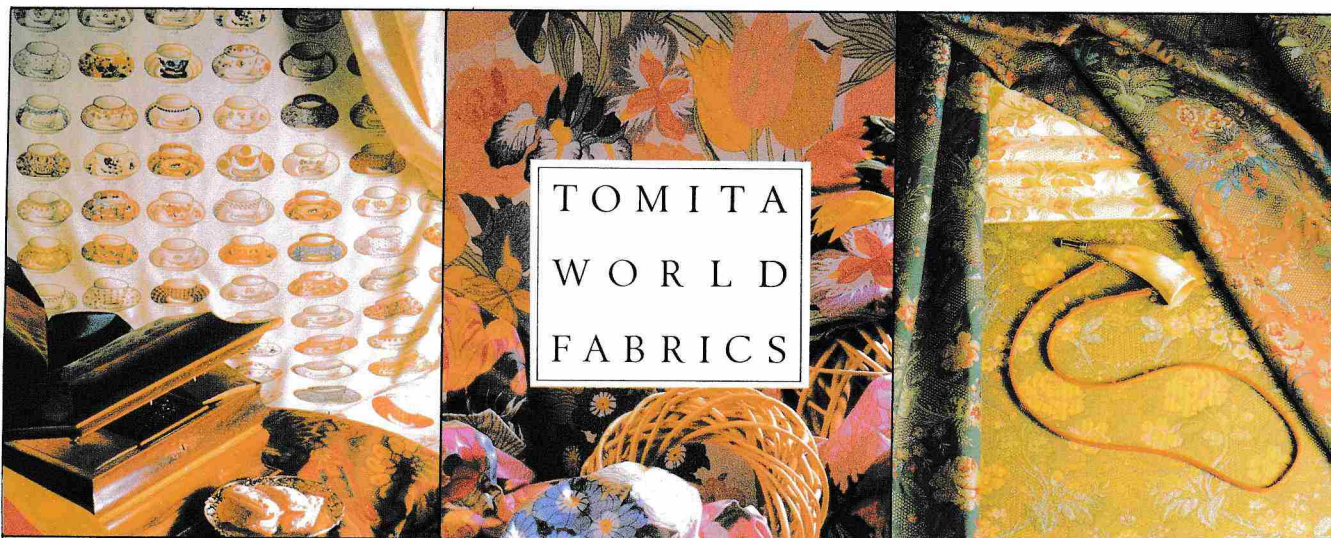


発行：社団法人日本建築美術工芸協会
Phone 03-3457-7998
Fax 03-3457-1598
〒108 東京都港区芝5-26-20
建築会館6F

振替：東京 1-365085

編集：(社)日本建築美術工芸協会広報委員会
柳澤孝彦(委員長)、宇津野和俊(副委員長)
大多了介、小玉 功、崎山小夜子
高部多恵子、玉見 満、

製作協力：(株)SP建材エージェンシー



TOMITA
WORLD
FABRICS

fadini borghi

H. LELIÈVRE

MANUEL CANOVAS

MÉTAPHORES

PIERRE FREY

インテリアを鮮やかに彩る、トミタの壁紙とインテリアファブリック。

トミタが、壁紙とともに海外の優れたインテリアファブリックをお届けしています。『トミタ ワールド ファブリックス』は、より魅力的なトータルインテリアコーディネートとプランニングのために、世界中から選びぬいたファブリックのコレクションです。



株式会社トミタ

本社：〒104 東京都中央区京橋2-3-16 TEL.03-3273-7551(代表)

東京営業部：〒140 東京都品川区大井1-24-5 大井町センタービル7F TEL.03-3774-7771

●お問い合わせは各ショールームまで、(東京)TEL.03-3273-7552 (札幌)TEL.011-631-8201 (大阪)TEL.06-449-1751 (福岡)TEL.092-781-2651



空気神社(山形) ステンレス・ミラー仕上 W5,000×D5,000(mm)

Tajima

ARCHITECTURAL METALS

自然の恵みを映す金属。

山形県朝日連峰の麓、朝日町の標高600mの山上に、世界でも類をみないという「空気」をご神体に誕生した「空気神社」。緑の中に置かれた鏡面パネルに、まわりの森羅万象四季折々の自然、月や星が映し出され、そして消え去る様はまさに生命を保持し、形成を促す「空気」を実感させています。

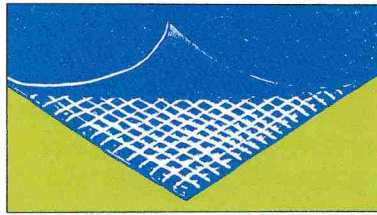
株式会社 田島順三製作所

本社 〒100 東京都千代田区永田町2-14-3 赤坂東急ビル ☎(03)3581-6291

- CSMは明彩色を可能にしました。シルバー、ホワイト、グリーン等の美しい色をいつまでも保ちます。
- ホワイトは太陽光線を良く反射し、夏季の表面温度は従来のシルバー仕上げより低くなります。従って、空調コストを低減し、省エネになります。

思い出

「親友のリカコに卒業したら東京に行くことや、ヤマオカ君にマラソンしたことなんかを、さまで、学校の屋上で話した。」



ポリエステル繊維をサンドイッチしたカラーゴムシートの「CSMシート」を使用する防水工法

トヨ-CSMシート絶縁工法

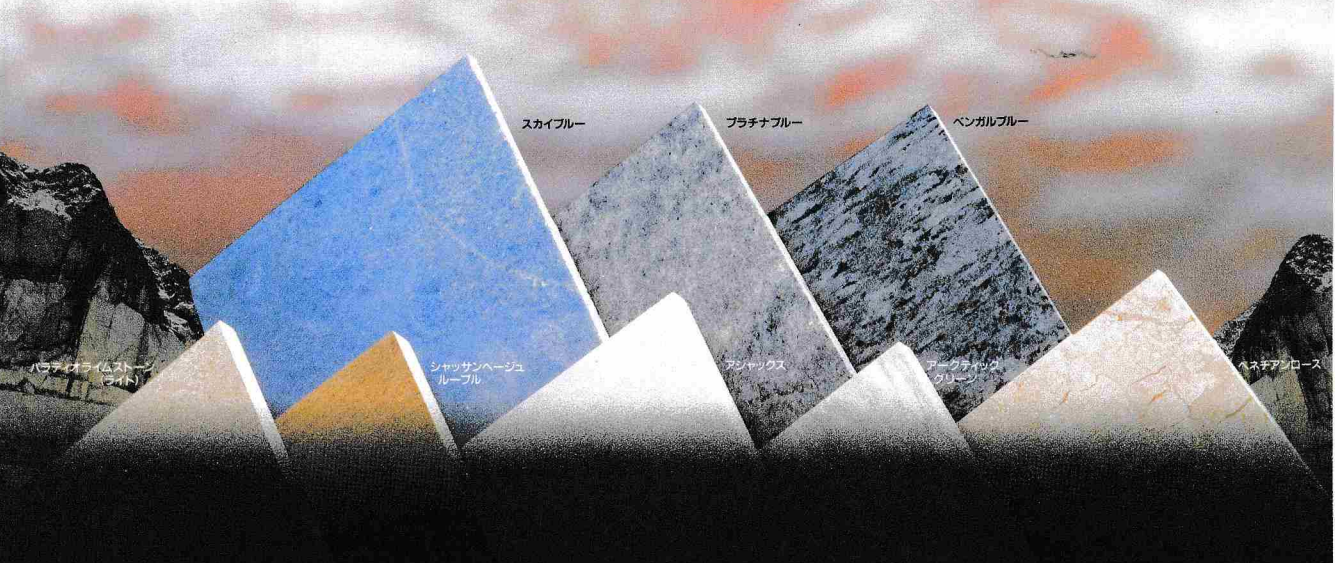


東洋ゴム工業株式会社
化工品事業本部・建築防水販売部

東京本社 〒151 東京都渋谷区千駄谷4-24-15 TEL:03-3404-6219
大阪本社 〒550 大阪市西区江戸堀1-17-18 TEL:06-441-1698

止まっていた時間が、動きだす。

提案します。
高品位素材
人に豊かな生活空間を



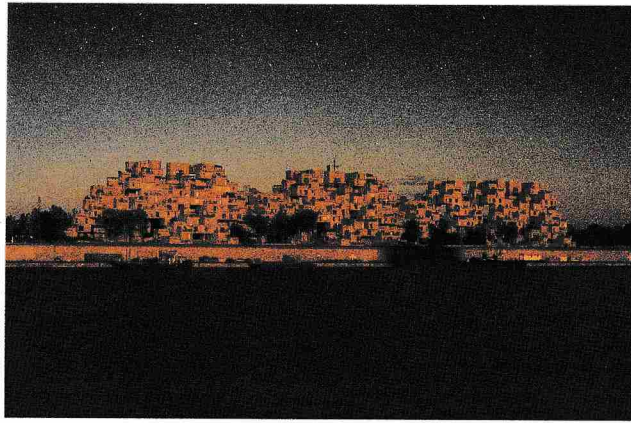
世界の歴史とロマンをお届けする。
品揃え業界No.1.信頼の品質と実績の規格天然石材

ナチュラルタイル by ABC shikai

カタログをご請求ください 〒100 東京都千代田区永田町2-12-14 ㈱エーピーシー商会 ファッション建材事業部 ナチュラルタイル係 TEL.03(3507)7111(代)

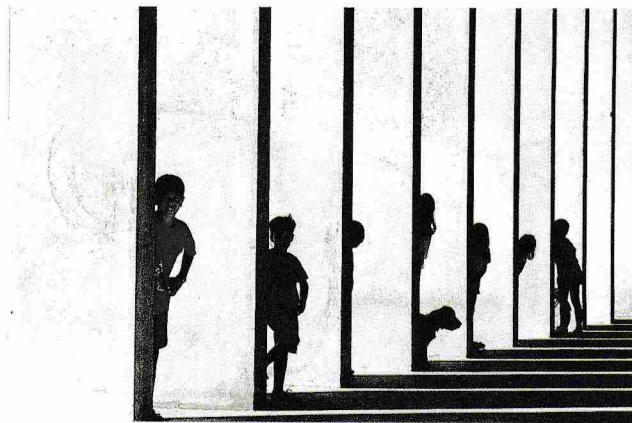
「アパートメント—平地 勲 写真集」

驚異のアイデア、ダイナミックな試行錯誤。20世紀の建築思想を雄弁に語り、そしてなお変遷を続ける集合住宅と、そこに生きる人々の表情を、写真家平地勲がとらえました。



ハビタ67全景

(設計:モシェ・サフデイ、カナダ、モントリオール)



ガララテーゼ集合住宅 回廊

(設計:アルド・ロッシ、イタリア、ミラノ)

- 書名／『アパートメント—平地 勲 写真集』
- 写真／平地 勲
- 解説／植田 実
- アートディレクション／岡本 一宣
- 発行所／(株)アーバン・コミュニケーションズ
- 定価／5,000円(税込み)〔写真120頁、解説10頁〕

(株)アーバン・コミュニケーションズ 〒105 東京都港区海岸1-5-20 電話03-3433-2111

感性空間を創造する

City Texture

ふるさとの秋の空をつくりたい。

あなたの心に住むふるさとは、どんな景色ですか。
高い空に赤トンボがすいすい、そんな景色を光と影で
演出しようと試みたのがパンチングアートメタル。



●パンチングアートメタル●

サンシャドー
「Sunshadow」

K METAL ARCHITECT
KIKUKAWA
菊川工業株式会社

〒120 東京都豊田區菊川2-18-10 TEL 03-3634-3231

← サンシャドーは全5シリーズ ●植物シリーズ●動物シリーズ●景色シリーズ●遊戯シリーズ●小紋シリーズ
★このほか、設計者のオリジナルなイメージによるオーダーにもお応えできる体制をととのえています
サンシャドーのイメージカタログを呈呈します。お問い合わせ下さい。